

震災と言葉

—— 沈殿している記憶

松 本 郁 恵

はじめに

東日本大震災から1年が経った。1年という年月の経過が、ある事件に対する「節目」という意味をもつならば、その節目とは具体的にどのようなものか。

2012年の3月11日に日が近づくにつれ、新聞やテレビで様々な震災特集が組まれた。1995年1月17日、神戸を中心に関西一帯を襲った阪神大震災。その被災者と、東北の被災者がテレビ中継を通して接続されていた。前者が画面に映る。神戸の元被災者は、惨憺たる光景を目の当たりにした被災当時のことや、復興に至るまでの原体験を語る。微笑を浮かべた表情と朗らかな語り口からは、元被災者の温かい人柄がうかがわれる。他方、応援のメッセージが綴られたファクスで四方を埋め尽くされた部屋に東北の被災者がいて、そこで中継を聞く。元被災者の語りが終わると、こんどは番組の司会者が、東北の被災者に何かコメントするように促す。カメラは新しい被災者の方に向けられ、画面には引きつった顔が映っていた。

番組の意図は非常に明快であった。震災を乗り越えた元被災者が、500km以上離れた東北の被災者にアドバイスをすることで、被災者同士が繋がる。このやりとりを通じて、苦境の最中にある新しい被災者は、復興へ向けて前向きになる。そうして誰もが、希望に満ちた心持で、震災から一年の節目を迎える。それがこの番組の筋書きであった。この番組が行ったように、震災という共通点を持つ二つの事件を安易に重ね合わせることは、震災の生臭さを脱臭化してしまう。このような復興への前向きなストーリーは、被災した魂を置き去りにする。

おそらく、阪神から東北を語ることはできないし、東北から阪神を語ることもできないだろう。日本の歴史に関する書物を開けば、地震や飢饉、水害、火

山の噴火といった数々の大災害が記されている。確かに昨年の震災は、その一頁に記録されるべき大事件であって、今後の歴史や災害史のなかに位置づけられよう。これからも未曾有の大事件は起こるだろう。その度に巨視的な視点が採用され、歴史的な文脈が参照されるだろう。しかし、震災は社会全体の経験である以前に、個人的な経験である。それぞれの出来事とは、非人称の誰かにとっての出来事ではない。一義的にはそれぞれの人びとにおける事件であるはずだ。一つの出来事における経験は、あなた以外の誰のものでもない経験である。そこには総体としての、あるいは非人称としての「被災者」など存在しない。

「被災者」とひとくくりにされた人々の気持ちに、個人の「私」が抽象的に寄り添うことなどできない。現地との距離、縁の深さ、そして自分が置かれている状況によって、それぞれの抱く感情は千差万別で、この期に及んでみんなで共有できるようなのっぺりした哀しみなど存在しない¹⁾。

震災をどこか他人事のようにしか感じられない人もいだろう。たとえば九州の方なら、東北に知人が1人もいないという場合も少なくない。また、それぞれが仕事の重要な課題や、両親の介護、クラスの間関係など、私事の不安や悩みを抱えている。そういった状況で、「実感として受け止められない」という感覚は、何らおかしくないと思う。メディアから伝え聞く情報を頼りに、被災者一般の痛みや苦しみを追体験するかの如くに感じるなど、ほとんど不可能だろう。

その一方で、震災の記憶に幾度も心を抉られ、いまの「日常」にある様々な非日常性に打ちひしがれている人がいる。生気なく朝を迎え、夜はかつての生活の追憶にふけり、絶望の淵に沈む。そのような人々が必要としているのは、「ガンバレ東北！」と

いった個人を外側から照らす大きな光ではなく、個人の内側に灯る小さな希望の光のように思う。そのためには、個人の内面と端正に向き合いつつ、自身の言葉を紡いでいくことが、一つの契機となると考えた。

筆者は、長期帰還困難区域となっている福島県浜通り地区で、18歳までを過ごした。震災発生から一年の間は、生活の中心は東京にありながら、ふた月に一度は福島に帰っていた。被災地の除染や避難の問題に関する報告や、市民の復興への取り組みを紹介するような客観的な記録は沢山ある。しかし、被災者自身による個人的な手記はあまり見られない。先に述べたように、震災という出来事は、社会的な出来事である以前に個人の経験である。それゆえ、被災者である筆者が震災の個人的な経験を振り返り記すことには一定の意義があると思い、筆を執るに至った。

本稿は以上のような関心と形式の下、以下のように進められる。まず導入として、被災の経験がこれまでどのような人々と、どのような言葉によって言語化されてきたのか一瞥したい(一節)。次に、被災地の高校生を取り巻く環境について報告する。また別に、被災地から離れ、職やコミュニティを失った被災者の状況について考える(二節)。第三節では、筆者の立場から、故郷が放射性物質で汚染されるという事件について、80年以上その土地に棲みつてきた「祖母」との関わりを通して考える(三節)。最後に、以上の振り返りが筆者にとってどのような意義をなしたのかについて触れ、本稿を閉じる。

1. 震災と語り―「言葉足らず」の感覚

2011年3月11日14時46分。この後に起こった一連の出来事を、我が経験として言葉に昇華できた被災者は、どれほどいるのだろうか。

まるで生き物のように陸を這ってくる、黒い濁流。水色の外壁は粉々に吹き飛び、鉄骨だけになった原子炉建屋。布団に梱包された老人を引き上げるヘリコプター。うつろな目をした肉牛が、無人の二車線道路をのっそり横断していく。「津波による死者一万人」、「直ちに健康に影響はない」、「原発事故によって放出された放射線量はチェルノブイリの約6割」といった文法的には正しい言葉は、目に飛び込んで

くる像とあまりに乖離していたように思う。「言葉に尽くせない」、「言いえぬ悲しみ」、「ヒステリー」、肉親や家を失ったことによる苦痛や悲しみ、見えない放射能への恐怖、これらの感情を言葉にできた者はどれほどいたであろうか。

一方で、非常事態に特有の奇跡的な出来事や、人の強靭さや美しさを伝える感動的な話がたくさん生まれました。しかし、それらの伝説が円満に反復されればされるほど、惨めな被災者との間に裂け目が生じた。ネット上ではユーモアや機知に富んだ短い激励のメッセージが流布した。併せて唱和などしてみるものの、それらの言葉はあまりに手垢にまみれていて、かえって空虚さを増し、すり抜けていった。それでも自身の口から語ろうとすれば、言葉は切れ切れ、口ごもり、終には失語状態となってしまう。他方では、タイトルに「3. 11」という単語を含んだ夥しい数の著作が刊行された。被災当事者の手に余る現実、著名な作家や思想家へ託された。彼らは震災の意味を問い、未来のための言葉を紡いだ。これらの幾つかに励まされる部分が大いにあった。その一方で、言葉は上手な書き手によって美しく充填され、さらわれていった感覚もあった。

この状況下で、「被災者のあなたは何かを感じ、思考している訳ではないのだ」と専門家が断定するのであれば、いったんそうと認めざるをえない。しかし、一体全体「何を」言えていないのか?という「何を」について語ることは出来ないのだが、「語れていない」という感覚の残滓は、確かに心の内へ堆積していく。

2. 福島県浜通り地区の高校生と地元就労者

福島の経験を言葉にするために、ヒロシマの被爆の経験を被爆者を通して向きあった大江健三郎の「ノート」は非常に参考になった。もちろん先ほどのテレビ番組のような安直な見通しで本書を紐解いたのではない。そこには広島の人間の沈黙とその感情について書かれてあって、いま沈黙する福島の人びとにも、次のような感情は少なからずあるように思う。

「原水爆反対とか、そういった政治闘争のための参考資料に、自分の悲惨をさらしたくない感情、

被爆者であるために、すべてが物乞いをしているとはみられたくない感情があります。」²⁾

安保闘争後に平和主義を自分のモラルの中核に据えることを宣言した大江は、1963年より広島各地を旅し雑誌『世界』（岩波書店）にいくつかのエッセイを掲載するようになった。広島から数多くの反応が返って来たようだ。引用部は、被爆直後の広島で負傷しながらも、息子に背負われ救護活動に赴き仕事をした医師、松坂義正氏の息子である義孝氏が、大江に送った手紙の一部である。ここで詳細に検討することは出来ないが、自分が経験を吐露する前に、「吐露する被爆者」を予知して傷ついてしまう事態、「当事者」の属性が自身の喉元を絞めるように要請した事態が読み取れる。

放射性物質が拡散した福島県内では、低線量被曝に対する認識、避難や除染などの問題をめぐって、被災者同士が疑心暗鬼となり、一部複雑な世界を形成している。その中で、状況に翻弄されながらも、それぞれの今後の生活方針を決断し、行動していく人びとがいるのも確かだ。

本節では、筆者の出生地である福島県浜通り地区の高校に焦点をあて報告したい。福島第一原発から同心円状の20km圏には、双葉高校（双葉町）、浪江高校（浪江町）、双葉翔陽高校（大熊町）、富岡高校（富岡町）、小高商業高校（南相馬市小高区）、小高工業（南相馬市小高区）、原町高校（南相馬市）、相馬農業高校（南相馬市）の8つの高校がある。震災発生直後、生徒約3000人は、避難先の高校へ転校か、サテライト校へ移るかの二者択一を迫られた。このうち過半数の生徒が24のサテライト校へ行き、残りは県内外の高校へ転校していった。

2011年5月9日、各地のサテライト校で始業式が行われた。避難先の高校で体育館を仕切って教室が作られ、教科書・ノート・鉛筆一本ない環境でスタートした。職業校では実習機材や農地がない、といった教室・教師・施設等の不足から、部活動・生徒会行事・学校行事が実施困難になった。生徒と教師は居候の身として窮屈な生活を送っていた。その中で他県の自治体などが生徒を招いてくれることも多々あったと聞く。昨年の秋頃からサテライト校は再編され、原町高校と相馬農業高校は現在本校舎に戻っており、南相馬市小高区の2つの職業高校（小高工

業・小高商業）は原町高校に仮校舎を置いている。

現在も本宮市にサテライト校を置く浪江高校は、今年度の入学希望者の定員80名のところを40名の枠に縮小して募ったが、新入生は7名だった。また浪江町にあった6つの小学校は統合され、福島県中通り地区にある二本松市の廃校を利用して仮校舎を設置している。昨年までの児童数の合計は約1200人だったが、計27名まで減った（2012年4月上旬時点）。そのうち今年度の新入生は計2名である。未だに帰還のできない地区の学校は消滅の危機にあり、学校に息づく伝統や文化も近い将来に失われる可能性は高い。

震災後に中学の同級生5人と何回か顔を合わせた。浪江町の中心部には海側と山側に1つずつ中学があり、町の中心部から離れた津島地区の一学年数名の分校を合わせると計3つの中学がある。親しくしていた同級生の殆どは、高校卒業後から浜通り地区で働き始めた。高卒後すぐに上京しても、結局戻ってきて地元の零細企業に就職した者も多い。みな震災以降は職を失い、埼玉や茨城など近郊に避難していた。特に家族と離れ避難した者は、震災について語る場を持っていなかった。この一年間の彼ら（自身も含む）には、震災を語る時の反応に幾つかの緩い共通項が見受けられた。

福島県の浜通り地区の被災者には、豊かな自然や近親の命が奪われ、家から追い出された故郷喪失者というイメージがある。一つは、「故郷喪失者」という紋切り型の水路に、一挙に自身の情動を流し込むこと。他人の眼にうつった標準的な被災者になりおおせることで、言いようのない悲しみや不安から解放されることもあるだろう。しかし、大方の鋭敏な神経の持ち主であれば、これに自己閉鎖的な陶醉の匂いを嗅ぎつけ、躊躇し、言動に関わる軽率さの回避に全力を注ぐ。そして弱々しく自己憐憫に陥っている者を誘う。またある者は、虚偽か本物か見分けのつかない無邪気さによって、自身の言動を軽やかにしながら周囲へ配慮しつつ、口を割っているようで割っていない、という形で自分を追い込んでゆく。もちろんこのような枠付けは、筆者が言葉を交わした人々から「感じた」ことにすぎない。

高校を卒業してから隣町である双葉町の工場で働いていた一人の友人と、今年の2月に再会した。地震発生から現在までの遍歴を報告し合う。彼女は昨

年3月12日の朝、着の身気ままで町役場から出されたバスに乗り込み、15日に津島地区の避難所で高放射線雲の下で被曝した一人だった。「こんなじゃ誰ももらってくれないよネー！」と明るく言って小さくなる。彼女は、将来自分の股の間から何かしら問題のある新生児が取りだされることを恐れているのだった。いま福島に、このように弱気になっている女や男はたくさんいるに相違ない。同月、環境省が水俣病被害者救済法を決定したことと関連して、テレビでは水俣病の歴史を振り返る番組が流れていた³⁾。無数の黒い旗と、そのなかに書かれた「怨」の白い文字が、風になびいてぶるぶると小刻みに震えていた。それから私は、過去に放映された水俣の映像を見るようになった。その内の一つに、チッソの社長に向かって一人の30代くらいの女性が怒号を挙げている場面があった⁴⁾。自分だって女なのに恋も結婚もしていない、とその女性は叫んでいた。女性の少女時代を想像すると、昂揚した想像力は飛躍して、うなだれた友人の像と重なった。

私は現時点で、被災地の若者に対しどのように行動していけば良いのか、自分にとっての何らかの答えを見つけられてはいない。現地で生活していない以上分からない部分も多い。出生地が福島であっても、現在東京で下宿をしている自分は殆ど対岸の人間であって、被災地を外側から眺める人間に近い。それでも、自分と彼／彼女らの距離を自覚しながら、耳を傾けること、その傾聴の姿勢が目につくように足を運ぶこと、少しでも助力になることをしたい。

ただ、その上で気をつけなければならないのは、被災者に対する自身の正義を遂行することが自己目的になってしまう場合である。頑なな善意の人は、閉口した被災者をよそに滔々と福島や被災地の「実態」を語る。しかしもちろん「実態」は無数にある。押し黙っていた被災者は遂に口を割り、「真正の」被災者として、「告発者」の顔をして現れるかもしれない。それぞれの被災に関して、自身の倫理的な優位性を競うところに、あまり意味あるものは生まれにくいように思う。素朴だが、個々の経験や方法の違いを調整しながら、環境と心を守るために協力していきたい。

3. 祖母の記憶と風土

本節は、福島第一原発事故を含めた震災の経験に関する、最も個人的な記録である。震災で故郷に永らく帰れないことが決定的になった時に思い浮かんだのは、「祖母は家で死ねないのか」ということであつた。わたし個人が震災を考えるにあたって、何より外せない前提条件となつたのは、祖母との記憶であつた。

福島県双葉郡浪江町は人口約2万人の小さな田舎町である。町は南東から北西に伸びた形をしており、東は太平洋に面していて、西は深い山々に覆われている。町には浜通りを南北に繋ぐ常磐線が敷かれており、1・2時間に一本の頻度で二両編製の電車が町を通る。この町の子どもの殆どは、「サンプラザ」という、小さなゲームセンターや衣料品売り場などが併設されたスーパーへ買い物に付いていくのを楽しみにしている。高校生ぐらいになると、服飾品や嗜好品などは電車で一、二時間程かけて、南のいわき市や北の仙台市まで足を伸ばして手に入れるようになる。ここ数年は国道沿いに24時間営業のレストランがポツリポツリと立つようになり、盆や正月には帰省した若者で賑わっていた。似たような風景の田舎町は全国にたくさんあるだろう。

私の家は浪江町酒井地区にあり、隣の双葉町との境界となる山のふもとにある。家から100m程の所には高瀬川が流れており、夏には鮎や川海老がとれた。家の敷地面積は、畑の端から玄関口につながる小路の端までを含めると、500坪ほどである。このうち家屋は、母屋と合体した巨大な精米機の部分もその一部とするならば、90坪を占める。母屋の半分は築100年になる古い家屋で、残りの半分は私が6歳のときに増築した。様々な植物や木々が、家屋を取り囲んでいる。家の裏には百数十本の杉の木と、二本の柚子の木、それと枇杷の木と栗の木が一本ずつ生えており、防風林の役目をしている。また、この防風林の中には土壁でできた蚕屋がたっていて、その脇には小さなけもの道があり、そこを縫って行くと畑にでる。畑では南瓜や白菜といった家で食べるための野菜が栽培されている。また、春には黄色い菜の花が、梅雨には薄い青色や紫色をした紫陽花が雨露を滴らせながら、美しく咲くのであつた。防風林は家の東側の竹林に繋がっている。夏の夕暮れ時に西日に照

らされ、サラサラと趣深い音をたてる竹林は、爽やかな妖艶さがあつた。竹林の中には小さな祠があつて、何かの神様を祀っている。静謐さを湛えた地蔵の無表情は、時に不気味な雰囲気醸していた。家の表にいくと、東側に田植え用の苗を育てるためのビニールハウスがあり、ここで5月の連休まで苗床を育てる。その脇に牡丹桜や、松の木、苔の生えた石などが並べられ、庭を作っている。西側には周りを土蔵で固めて掘った池と、明治の初期に立てられた蔵があり、それらの周りにはまた違う種類の木が茂っているのであつた。

18歳までこの家で暮らしていた時は、私は常に庭の方を向いて茶の間の掘りごたつに身を埋めていた。その右手に祖母が鎮と腰を落ち着けていた。茶の間から見える柿の木を、西洋風の老婆の顔に見紛うことがよくあつて、私の少女時代の夢の対象となつていた。いまでも私の心の一部はこの茶の間にいる。

父方の祖母である「秀子おばあちゃん」(以下、秀子婆)は、ちょうど20歳の時に終戦を迎えた。台湾で生まれ、3歳の時に浪江町の同じ地区に引き取られてきた。秀子婆の父親は、石高の高い士族か何かで、台湾総督府に勤めていたらしい。6人兄弟姉妹の次女であつた祖母だけが、終戦前にこの土地に引き取られてきたらしく、幼い頃は寂しくなつてよく布団で泣いていたらしい。私はこの人について様々なことを憶えており、この人の半生について書けば限りがない。

小学生のころ、家の爺婆に戦争の話を書いて調べてきましょう、という宿題を出されたことがあつた。「欲しがりません、勝つまでは」という標語を掲げて、何でも我慢したんだとか、「学校では竹槍を持って外人の眼を突く練習だつてしたんだ」とか、引き取られてきた当時のことも、「あの高瀬川のほとりをトンボが飛んでてナー、自分より年の小さな男の子がじゃがいもを食べながら歩いてきたことは覚えてんだ」など、まるで昨日のことのように当時のことを話す秀子婆に、非常に驚いた記憶がある。

私が中学1年の時、曾祖母「トミばあちゃん」(以下、トミ婆)が他界したが、曾孫である私は葬儀の際に悲嘆に暮れた記憶はない。なぜならトミ婆は家族の中ではちょっとした問題児であつたからだ。トミ婆は大正生まれの気性の強い方で、若い頃銀行に

務めており、わたしが物心つく頃には認知症がかなり進んでいた。みなで食卓を囲む平日の晩飯どきや、日曜の昼飯どきにはいつも、何時のものとも知れぬ通帳や紙切れを持ちだしてきて、父の名を呼びながら、「この400万の金は×☆△○金融さあるはずなんだ、カズシゲが持っているはずだから、デンワで聞いてくれねえか」とか、とにかくいつも一塊の書類を傍らに置いて、それをいじくりまわして、お金のことをブツブツ言つていた。大抵は流したり無視したりしてしたが、あまりにも取り合わないと、曾孫の私の手首を掴んで離さないこともあつた。大熊町の老人保健施設にあづかつて頂いてからはトミ婆は大人しくなり、安心して茶の間の掘りごたつに身を埋めることができるようになった。

秀子婆は若いころに、このトミ婆にいじめられていた、ということは後で知つた。特に強い衝撃を受けたのは、秀子婆の息子、「正宗伯父さん」の話である。といっても、伯父さんの歳になる前に死んでしまった方で、12歳という永遠の若さのまま、墓石に名前が刻まれている。秀子婆が若い頃、当時家にはトミ婆の息子娘たちと、秀子婆の息子たちの、二世帯と一緒に暮らしていた。トミ婆の息子娘のうちの長男にあたるのが、「忠正おじいちゃん」(以下、忠正爺)で、秀子婆の旦那である。一家の戸主は、成人した既婚の長男である忠正爺だが、家で最も声の大きかつたのはトミ婆であつたのだろう。トミ婆の息子娘は4人ほどいて、その一番下の子どもは、秀子婆の一番上の子どもと10も歳は離れていなかった。トミ婆の子どもと比べると、秀子婆の子どもらはあまりよい扱いは受けていなかったようだ。

秀子婆は私に、正宗おじさんが小学6年生の時、修学旅行に行つてもいいか、親父である忠正爺に聞いていた時の一場面を、語つてくれたことがあつた。「正宗はな、修学旅行に行くの、とても楽しみにしてたんだ。正宗が、じいちゃんに向かって聞くんだ。「新しい靴、買ってくれるか？」—「アア、買ってやる」。そしたら「新しい服も、買ってくれるか？」つて聞くんだ—「アア、あぁ、買ってやる」つて答えるんだ」

正宗伯父さんは、「そんなもんは駄目だ!」という親父の厳格な拒絶を予想しながらも、おそろおそろ聞いてみたのだろう。すると、案外簡単に「アア」の応えが得られ、新しい洋服や靴を纏つて修学旅行に出かけられる喜びにうち震える、という感じだつ

たのだらう。そして秀子婆は横でその光景を温かい気持ちで見ているに違いない、とも考える。だが正宗おじさんは、修学旅行の前に、薬も十分に与えられず風邪で床についたまま死んでしまったらしかった。

こういった祖母の口から描写される、かつての茶の間の雰囲気は、いろんな情感や憶測に満ちているのだろうが、それだけに孫の頭脳には、熱っぽくこびりついた。そのおかげで、生きた時代が重なることのなかった正宗おじさんと、親しい間柄を築いたような気分になるのであった。

私が大阪の大学に合格して故郷を離れてからは、秀子婆はどんどん老いていった。食が細くなり、足腰が弱くなった。毎年5月の連休は一家揃って田植えの作業をしていたのだが、秀子婆は作業の一員から外れ、監督役になった。昔はあんなにシャキシャキ働いていたのに、今は茶の間で三度の飯の合間に、ただじっと座っているか、家の周りをトコトコ散歩するかだ。身体の衰えの割に認知症の気配などはなく、秀子婆の瞳の奥には呆と疼くようなものが感じられるのだ。ふと、祖母は何を幸せと生きているのだろうか？と思い、二人で茶の間にいる時、「今幸せか」と聞いてみたことがあった。秀子婆からは「おばあちゃんは今が一番幸せだァ、お父さんもお母さんも、みんな優しくしてくれるから」とだけ返って来た。

震度6強の激震が家を襲った時、祖母は茶の間の掘りごたつの中に隠れ、震えていたらしい。家族から震災直後の放浪記を聞いた。11日は多発する余震の中、父・母・祖母の三人は低温の車内で夜を明かした。翌日12日の朝7時、福島第一原発が10km圏内に避難命令を出し、着の身着のまま避難した。この時は浜通りの住人の誰もが、2・3日で帰れると思っていた。町から西方向に伸びる国道114号線は、津島地区の避難所へ向かう車で大渋滞だった。食料はなく、家族3人はおにぎり一個を分け合って食べたらしい。それから家族は二本松市の母の弟夫婦宅を始めとして、他の親戚宅を転々とした。その間に福島第一原発の1号機、3号機、2号機、4号機はボンポコ爆発していった。私が5月に福島を訪れた時、両親が一時帰宅をした時の家の写真を見せてくれた。家の壁には亀裂が入り、到る所に奇異な隙間

ができていた。障子は無残に破け平行四辺の形になり、天井を走る木は裂けていた。損壊した屋根瓦から雨水が入り、畳や天井にはカビが生えていた。どうやらこれがこの家の最後の姿らしかった。

今年1月の一時帰宅の際に、父が家屋内の放射線量を測ってきた。原発から北西7.5kmの距離にある自宅は、母屋の茶の間で毎時15 μ Sv、庭先の平均値は20~25 μ Sv、雨桶下で260 μ Svを記録した。国は年間積算放射線量に応じ、次の3つの区域に編成する見通しだ(2012年5月初頭時点)。一つが、早期の帰還を目指す「避難指示解除準備区域」で、年間20mSv以下。もう一つが、帰還まで数年程度かかる「居住制限区域」が、年間20~50mSv。最後の一つは、5年以上は戻れない「帰還困難区域」で、年間50mSv以上の地区が該当する。因みに毎時9.5 μ Svの年間積算量は50mSv、毎時19.0 μ Svで年間100mSvとなる。参考だが、原発事故前の原発労働者の年間被曝線量は20mSvとされていた。3つ目の帰還困難区域には、6つの町村が設定される見通しで、放射線量の高い地区はまだ除染技術が確立されていない。

1月の一時帰宅で撮られてきた家の写真には、変化があった。庭の雑草が背丈以上に伸び、家を隠すようになっていた。写真に映る見事な雑草と、記憶の中にある鮮やかな庭。この二つの現実の位置が、スルッとすり替えられた瞬間だった。自然は人の生活と一体化し、調和をなしている限りで美しいのだと思った。家や花を隠すまでに繁茂した緑は、禍々しいものでしかなかった。秀子婆は写真を見てどう思ったのだろうか。親戚宅の茶の間で、俯き加減に鎮座する祖母は硬い表情をしていた。「こんなところで、死にたくねえ、と、思ってんだ」。その声は怨みを含んでいるらしかった。土地に棲まう人を強制的に引き離すというのは、人の手足を引きちぎるようなものだと思った。そして、家も祖母も死にかけているのだと思った。

祖母について想いを巡らせ、負の感情の循環が回り始めた時は、亡くなられた方の不幸と、生者の幸運を単純比較して、鎮静剤とした。しかしそれも長くは続かず、そのような鎮静剤は欺瞞でしかなく、死者は死者で恠しいのであった。東日本大震災の死者数は15857人で、行方不明者数は3057人に上る。これに避難生活から体調を崩すなどして亡くなった震



2012年1月の一時帰宅で撮られた家の庭

災関連死1618人も加わる(2012年4月下旬時点)。地震発生直後、宮城県や岩手県では翌朝から津波被害による行方不明者救助に全力が注がれた。テレビでは、懸命の捜索により奇跡的に助かった人々のニュースが流れていた。しかし、浪江町・双葉町・大熊町・富岡町では、原発事故のために12日の朝より誰も助けに入ることはできなかった。安否を心配する身内にとっては見殺しも同然の仕打ちであっただろう。本格的な捜査が始まった時には季節は移り、既に遺体捜索に変わっていた。下に、筆者に影響を与えた一篇の詩を引用した。

それまでどうか眠りにおちるな
石いっぱい死者は それまでどうか語れ
夜ふけの浜辺にあおむいて
わたしの死者よ
どうかひとりであつたえ
浜菊はまだ咲くな
畔唐菜はまだ悼むな
わたしの死者ひとりびとりの肺に
ことなる それだけのふさわしいことばが
あてがわれるまで

「死者にことばをあてがえ」⁵⁾

わたしの死者ひとりびとりの肺に
ことなる それだけの歌をあてがえ
死者の唇ひとつひとつに
他とことなる
それだけしかないことばを吸わせよ
類化しない 続べない
かれやかのじよだけのことばを
百年かけて
海とその影から掬え
砂いっぱい死者に どうかことばをあてがえ
水いっぱい死者は

南相馬市内にある福島県立原町高等学校は、震災発生直後に遺体の安置所となった。今年の一月に高校の近くを訪れると、体育館には明りがとまり部活動が普通に行われているらしかった。体育館には黒いビニールに包まれた沢山の屍体があった、という報道は記憶違いであったか?とまごついた。

2節で述べたように、震災発生後、原町高校は相馬市と福島市内の高校を借りて、サテライト校として機能していた。昨年9月末、南相馬市の北部は緊急時避難準備区域が解除され、10月下旬にもとの校舎に戻ってきたのだった。その時の報道も漠然と見ていた。マイクを向ける報道記者に、「学校の校舎に戻れて嬉しいです」と無垢な笑顔を浮かべ答える

男子生徒。この笑顔にも素直に安堵することができず、編集される際に切り捨てられた顔があったのではないか、という疑惑が湧いて釈然としない。時間の区切りに急かされ、拙速に明るい方向へ進まされていくように見える。もちろん被災した人びとの生活の基盤は早急に築かれてほしい。しかし復興の先陣を切って、地域を下支えする人びとの内にも、語りえぬまま沈殿している記憶がある。

4. 振り返りを振り返って

本稿を公的な場へ出すことに対し背中を押したのは、「自分が周りを激励しなければならぬ」という意思だった。一種のヒロイズムかもしれないが、とにかくこの使命感が契機となったことは確かだ。だが書き終えてみると、本稿は自分が自分に向けた激励の言葉であったことに気づいた。

本稿の冒頭で、「小さな希望の光を自身の内側に灯すために、個人として震災に向き合い、自身の言葉を紡ぐことが重要だ」と断定的に述べた。もちろん希望への方途は、別の仕方でも探れるに違いない。

わたし個人としては、震災を引き受け、前進しようとするとき、死にかけている者や死んでいった者の顔に接近することが要請された。鳥瞰的な視点から震災一般について考えるよりも、地を這うように土地や顔をもつ人々に想いを馳せることの方が肌に合っていたし、即席の希望に流し込まれることを防ぐために、必要な作業であったように感じる。

注

- 1) 文藝春秋編『3.11から一年：100人の作家の言葉』文藝春秋社、2012年、171頁。
- 2) 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』岩波新書、1965年、4頁。
- 3) NHK ETV特集『花を奉る 石牟礼道子の世界』2012年2月26日放送。
- 4) NHKスペシャル『戦後50年 その時日本は 第4回 チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』1995年放送。住民の起こした裁判に対し、チッソが全面敗訴した1973年の場面。
- 5) 辺見庸『眼の海』毎日新聞社、2011年、47-48頁。